広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	シャルル=ルイ・フィリップ『ビュビュ・ド・モンパルナス』考 : 群衆問題を中心に
Author(s)	東海, 麻衣子
Citation	フランス文学 , 28 : 31 - 39
Issue Date	2011-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041112
Right	
Relation	

シャルル=ルイ・フィリップ『ビュビュ・ド・モンパルナス』考
～群衆問題を中心に～

東海　麻衣子

はじめに

1880年から1910年の30年間で、パリの人口は200万人から300万人にまで膨れ上がった。新しい文化が次々と花開き、消費社会に拍車がかかるパリに、フランス各地から人々が雲霞のごとく押し寄せ、街を埋め尽くしていく。

では、こうした人々が、社会層という枠組みから抜け出て、群衆という一塊のエネルギーに変貌するとき、個人はどのように反応するのだろうか。ギュスターヴ・ル・ボン（1841～1931）は、19世紀末を« L'ÈRE DES FOULES »[1] と呼んだが、19世紀末パリという象徴的な磁場を舞台とする小説において、この時代はどのように映し出されているのだろう。

本稿では、1901年に出版されたシャルル=ルイ・フィリップの代表作『ビュビュ・ド・モンパルナス』[2] を「群衆の時代」の映し鏡として捉え直してみたい。そして、そこに現れる群衆と個人の問題について考察を試みたい。

パリの群衆　―「氾濫したパリ」

『ビュビュ・ド・モンパルナス』は、光と喧騒に取り巻かれる夜のパリ、セバストポール大通りの光景描写から始まる。

> Les voitures qui roulent, les lumières crues, la foule des rues, la luxure et le bruit forment une confusion de Babel qui effare et fait danser trop d'idées à la fois. (p.13)

鐘を鳴らし、ライトを煌々と照らして忙しく行き交う馬車や路面電車。街路樹に陰影をつけるアーク灯の白々とした光。その中を、声高に話しながら通る男たち、男たちに声をかけられる女たち、二人連れの恋人たち、娼婦たち、公安の警官たち、テキ屋たち……。彼らグラン・ブルヴァールに向かう「群衆」に混じって、主人公であるピエールが歩いていく。「すべてのおのぼりさんたち」« Tous les provinciaux » の足をすくませるパリにあって、半年前にパリに出てきたばかりの彼もまた例外ではない。彼は、田舎では目にすることのない群衆の存在に圧倒され、以下のような印象をもつ。

> Il [=Pierre] ne connaissait personne et marchait toujours, et des passants nouveaux passaient, tous semblables, avec leur indifférence, et qui ne le regardaient même pas. Leur bruit l'entourait comme celui d'une multitude dont il ne faisait pas partie. Il les voyait par masses, avec des remous et des gestes, gais comme quelques éclats de rire qu'il avait entendus au passage et brillants comme quelques regards de femmes qu'il avait vu briller. (p.14)

群衆の性質と群衆に対峙する個人の心情を端的に表した文章だが、こうした心情を心理学的に分析するとどうなるのだろうか。1980 年代、ギュスターヴ・ル・ボンの再評価を促したセルジュ・モスコヴィッシの分析を見てみよう。

> 個人が寄り集まるたびごとに、たちまち群衆が姿をあらわし生まれ出る。個人は互いに混じり合い、混淆し、変貌する。彼らは、彼ら自身の個人的本性を絞め殺す共通的性格を獲得し、彼らの個別的意志を沈黙せしめる集団的意志を課せられている。こうした強制力が現実の脅威を表現している。多くの人間たちは、自分がさいなまれているような気がする。[3)]

以上のように指摘される群衆の性質を鑑みるとき、ピエールの不安感がより明瞭になる。群衆に違和感を覚え、群衆に飲み込まれまいとする彼は、「自らの心に降りていき、そこに歓びを感じる必要」« Il avait besoin de descendre en lui-même et d'y trouver, en face de ce qui passait, quelque joie pour n'être pas perdu au milieu de l'universelle gaité. » (p.14) を感じる。しかし、彼の「個人的本性」を守りたいという感情は、快楽的で楽しげな群衆に混じりたいという欲望の前に、もろくも崩れ去っていくのである。

> Paris débordé le [=Pierre] roulait, le prenait entre ses grandes eaux et l'entraînait, Pierre Hardy, fils d'un marchand de bois, ami de Louis Buisson, candidat à l'examen de conducteur des Ponts et Chaussées, l'entraînait entre ses deux rives perdues, et l'entraînait jusqu'au bout du monde. (p.20)

どのような出自で、どのような人間かといったことは一顧だにされず、ピエールはただただ、「氾濫したパリ」に流されていく。そこでは、出自や人間性といった属性よりも重要なものが存在するのだ。では、群衆を支配するその重要なものとは何だろうか。

それを示唆するかのように、この小説では、あらゆるものの値段が全編を通して列記されていく。登場人物たちの収入からテキ屋の売る戯れ唄の値段まで事細かに記載されていくのだが、まず、通りすがりの高級官僚らしき男の内省から見てみよう。

> De gros hommes fument un cigare avec satisfaction et pensant : « Je suis un gros fonctionnaire qui gagne douze mille francs par an ». (p.11)

比喩的存在として通り過ぎる男の想像上の独り言ですら、あえて「年収1万2千フラン」という数字が提示される。続いて、ピエールの収入「月150フラン」« cent cinquante francs par mois » (p.14)、家賃「月25フラン」« vingt-cinq francs par mois » (p.15)、また、5歳上の同僚であり親友であるルイ・ビュイソンの収入「月180フラン」« cent quatre-vingt francs par mois » (p.15)。そして、売春婦ベルトの値段が「1時間5フラン」(p.24) であることが次々に記されていく。

これら金額の羅列は、登場人物たちの価値観を反映させたものと考えられる。彼らは皆、「いくらか」という判断基準で動き、「いくらの価値をもつ人間か」という価値基準で人間を査定しているようだ。それが、群衆という顔の見えない集団を突き動かす動機であり、そこに投げ込まれた個人は、否応なく、そして無自覚のまま、それを共有することになるのである。

では、こうした「氾濫したパリ」すなわち群衆の中にあって、個人はどのような行動をとっていくのだろうか。ピエールの場合から見ていきたい。

個人1 ― ピエール

孤独に歩いていたピエールは、大道芸人の周りにできていた人だかりの中で、売春婦のベルトと出会う。この出会いが、彼を、田舎から出てきたばかりの一個人から、群衆の一員へと変えていく契機となる。

気弱なピエールは大人しそうなベルトに金を払い、関係をもつのだが、彼女が売春婦らしくないことも手伝って、まるで恋人ができたかのように心躍らせる。しかし一方で、次のように考えざるを得ない。

> Pierre Hardy, au lendemain de sa rencontre avec Berthe, se sentit un peu calmé. Cette petite femme qu'il avait eue pour cinq francs pendant une heure entière était flexible et malléable comme devaient l'être les femmes qu'on ne paie pas. (p.34)

いみじくもベンヤミンが「売春婦への愛は、商品への感情移入の神格化である」[4] と言ったように、ピエールにおいても結局、ベルトは「1 時間まるまるで 5 フランの女の子」というにすぎない。いくら彼女の美点を数え上げ、恋愛感情を掻き立てようとも、その愛は、「商品への感情移入の神格化」でしかないことに彼は無自覚だ。そして、それは、ピエール個人の問題ではなく、彼が引きずり込まれようとする世界の必然なのである。

> Puisque nous vivons dans un monde où les plaisirs se paient, Pierre jugea que ce plaisir valait cinq francs. (p.34)

「個人的な感想にすぎないことをあえて客観的真実のように述べる」というフィリップ独特の手法を、スピッツァーは、« pseudo-objective motivation »「偽客観的動機」[5]と名付けたが、ここでもそれを指摘することができる。つまり、「我々は、快楽が金で買われる世界に生きている」という単なる独断が普遍的真実のように語られることによって、群集心理の罠が示唆されているのだ。

一人になれば、故郷を思い、友人と静かに語らい、ベルトの運命を思いやるピエールだが、自分の欲望をもてあまし、街路に出た途端、買春を正当化する群衆の心理に同化してしまう。「こんな世界に生きているのだから」と自嘲的に自己を正当化する者にとって、それは何とも都合の良い言い訳となってくれるにちがいない。このようにして個人の心情が群衆の総意に飲み込まれ、盗まれていく。個人の思考力は麻痺し、群衆はますます肥え太っていく。そして、そのことにピエールはいまだ無自覚なままなのである。

個人２ ― ビュビュ

では次に、「今日まで続くモヴェ・ギャルソンの原型となった」[6] と評されるもう一人の主人公ビュビュの場合を見てみたい。ベルトのヒモであるビュビュは、ある日、ベルトが梅毒に罹ったことを知らされる。

抗生物質の普及によって第二次世界大戦後に突然終わりを告げるまで、梅毒の恐怖はヨーロッパ全土を覆い尽くすものであった。四肢の痛みや麻痺、知能障害といった症状もさることながら、容貌のおぞましい破壊が、人々にとって梅毒を何よりも恐ろしい病にさせていたのである。そうした梅毒に、登場人物のことごとくが罹患していく『ビュビュ・ド・モンパルナス』。クロード・ケテルは、この小説を「売春と梅毒に関しての正真正銘のドキュメンタリー」[7] と評しているが、では、彼ら登場人物たちは梅毒をどのように捉えていたのだろうか。

その恐怖は、ビュビュにとって最も深刻に捉えられている。恐ろしいものなど何もないビュビュであるが、「だが梅毒だけは！」« Mais la vérole! » と言い募りながら、あてもなく街を歩き回る。彼が 14 歳のとき、梅毒で死んだ 22 歳の青年を、近所の人々は「完全に腐って死んだ」と噂したものだった。「完全に腐る…」« Être complètement pourri ... » (p.45) 。生まれて初めて知る恐怖と迷いに苛まれながら、彼は、「時計河岸」から、「監獄の匂いのする裁判所」へと歩いていく。「時計河岸」は警視庁のある通りである。売春婦が捕えられるこの「時計河岸」の警視庁内にはまた、1843 年から売春婦のための無料診療所も置かれていた。[8] そこで梅毒検査が行なわれていたのである。つまり、ビュビュが無意識に辿っていくこの順路には、梅毒に追われ、警察庁、裁判所、監獄へと導かれていく彼の未来が暗示されていると考えられるのだ。そして、その道すがら、ビュビュは、強盗も殺人も平気で犯す友人ジュールに出会う。そして、「自分も梅毒に罹ったことがあるが、放っておけばすぐに治る」と請け合うジュールの言葉に、それまで囚われていた恐怖を突然かなぐり捨てる。そして、ベルトの梅毒を積極的に身に引き受けようと決意するのである。「梅毒に罹ったからといって、女を捨てるわけにいかない」という友人の言葉に男らしさを感じ、肉体が腐り、骨の溶けるというおぞましい性病に怯えていた自分の感覚を早々と切り捨てる。その短絡的で愚かしい行動は、まるで操り人形のようだ。もしくは「誰に対してでも自分と相手とを同一視してしまう態度、ある種の〈自己喪失状態〉」にあると言えるのかもしれない。今村仁司氏は、こうした状態こそ、群衆社会が人々を追い込んでいく状態であると指摘している。[9]

こうして、すっかり気が大きくなり、ジュールとともにカフェに入るビュビュ。モンパルナス駅の正面にあるカフェでアブサンを飲む彼らを尻目に、再度「氾濫したパリ」の姿が活写される。

> De grosses voitures secouées, des fiacres aux vitres dansantes, des omnibus et des tramways avec leurs roulements et les cris de leur corne, des sifflets de locomotives, des passants en sueur, le soleil pesant de cinq heures, la poussière d'un soir d'août, et les départs et les retours, et cet aller de milliers d'hommes, formaient une vie infernale avec des grues à vapeur, avec des wagons, avec des hommes, des voitures, des bêtes et des caisses, avec la civilisation des usines et des gares, avec tout ce qui roule et tout ce qui s'en va, avec le temps qui passe en hurlant. (p. 50)

電気とともにこの時代を象徴する鉄道によって、地方からパリへと、ひっきりなしにやってくる労働者たち。田舎からパリに出てきたピエールが勤めているのが鉄道

会社であることも、この小説世界の象徴的意味合いを帯びていよう。人やモノがあつまり地獄絵巻を繰り広げる、そんな躍動するパリの中を、「時」が「唸り声をあげて過ぎていく」。

こうして、ベルトと積極的に関係を続けるビュビュだったが、梅毒治療のため、ベルトが入院してしまうと何もすることがない。すると、これまで彼の与り知らぬところで勝手に唸り声をあげて過ぎ去っていた「時」 が、彼に目をつける。

> Parfois le temps devenait sombre et restait immobile au-dessus de sa tête comme un voile d'ennui, comme une chose indifférente et morte. (p.65)

遊ぶ金もなく、一晩中、一人で家にいるビュビュ。梅毒にさえ打ち勝ったビュビュだが、倦怠の前では手も足も出ない。そして、倦怠が彼に一人内省に耽ることを教え、人生を考えさせる。

> Il comprenait bien mieux, à présent. Un peu de douleur nous éclaire et nous montre les maux que nous ne savions voir, comme des frères éternels et meilleurs. Il sentait encore que le bonheur est précaire, que notre cœur est une ruine noire branlante.(p.66)

倦怠という「わずかな苦悩」が、群衆の中で〈自己喪失状態〉にあったビュビュを、一時個人へと引き戻す。とはいえ、それによって導き出される彼の省察は、悪という突破口にしか行き当たることはない。とうとう食い詰めた彼は、二人の友人とともに強盗に入るのだが、結局警官に捕まってしまう。

個人３ ― ベルト

では最後に、ビュビュが捕まり、一人ぼっちになったベルトの場合を見てみよう。

退院したベルトは、妹のブランシュと暮らし始める。天性の売春婦であるブランシュは、群衆を支配する価値観を早くから飲み込み、何の苦もなく、天職に従事している。

> Elle［= Blanche］ vivait, joyeuse et inconsciente, et puisque l'argent est une fin en ce monde, elle n'avait ni l'idée du bien ni celle de l'honnêteté et se sentait heureuse comme un homme à son but, du moment qu'elle avait les poches pleines d'argent. (p.73)

あらゆる美徳を歯牙にもかけず、金と快楽の世界を泳ぎ切るブランシュ。彼女は、群衆を象徴する存在として描かれている。それに反して、ベルトは群衆の価値観に染まりきることもできず、かといって、個人の理性だけで動けるほどの自信も世間知もなく、もがき苦しむ。効率的に大金が稼げるというだけの理由で、造花作りの女工から売春婦になったベルト。ビュビュに植えつけられた判断基準に従って行動してきたベルトは、その司令塔を失い、途方に暮れる。孤独をかこつ彼女はしばしばピエールを訪れ、しんみり語らうのだが、とうとう疲れ果て、ピエールに助けを求める。他人に慈悲を求めることがいかに高くつくかを知っているベルトだったが、もはやどうすることもできないほど疲れきってしまったのである。そんなベルトの「時」は次のように進んでいく。

> Puis décembre et le Premier Janvier, tout passa ; mais depuis le départ de Blanche, le temps passait avec fatigue comme si, lui aussi, il eût manqué d'entraînement. (p.93)

群衆の象徴であったブランシュが監獄に入ってしまうと、これまで「氾濫したパリ」の中を「唸り声をあげて過ぎていた時」すなわち、群衆を取り巻く「時」は活力を失い、倦怠感をあらわにする。そんなある日、ベルトの父親が亡くなる。ベルトは悲しみ、自分の過去を恥じて改心するのだが、とはいえ、喪服を買う金を稼がなくてはならない。そのために、セバストポール大通りを「3 時間」歩き、二人の男から、「10 フラン」と「5 フラン」を手に入れる。まともな生活への憧れと、断ち切れない悪習の中で苦しみながら、ベルトは次のような願望を抱く。

> Comme elle avait envie de s'asseoir et de regarder passer le temps, sans faire un geste, et avec des idées tout entières qui couleraient avec le temps ! (p.101)

個人を取り戻すということは、個人の「時」を取り戻すことだとも言えるだろう。それまでの彼女には、座って何もせずに、過ぎ行く「時」を眺めることなどできなかった。売春婦になってからの彼女は、「氾濫したパリ」にあって、「唸り声をあげて過ぎていく時」の中で、流されるままになっていたのだ。ベルトは、貧しくともまっとうな生活を送りたいと強く願う。そして、再び造花作りの仕事を見つけ、ピエールと共に暮らし始める。けれども、そんな平穏な暮らしが始められたのも束の間。寝入っているピエールとベルトのもとに、監獄から出たビュビュがやってくる。ベルトに平手打ちをくらわせ、引き立てていくビュビュ。ピエールはビュビュの言いなりに、ベルトの値段「5 フラン」を支払い、彼らが出ていくのを見送るしかな

い。こうして、ベルトはもとの非情な世界へと戻り、物語は幕を閉じるのである。

おわりに

群衆に飲み込まれるということは、世間一般に流布する価値観を自らのものと取り違え、自らの理性や判断基準を見失ってしまう一種の錯乱状態であると考えられる。この小説では、こうした群衆問題を体現する者として、金で肉体を買われる売春婦が描かれ、そして、群衆の勝利で終わる。人間の善とは相容れない、金の支配する世界。ベルトやピエールのように個人的な美徳にすがろうとする人間は、この世界の敗者となるしかなく、そこで勝利するのは、無自覚に群集心理を受け入れ、いわば動物的に生きるビュビュやブランシュのような人間なのだ。

作者フィリップは、世界最古の商売と言われる売春婦のあり方に、近代の金銭至上主義に翻弄される群衆の姿を重ね合わせ、そこに生じる人間性の喪失に疑問を投げかけている。金銭が人間の評価を決め、群衆が個人を飲み込んでしまう世界が、果たして文明の行き着く先なのだろうか。電気や鉄道、梅毒といった極めて19世紀的なモチーフをちりばめながら、近代資本主義のあり方を懐疑的に映し出す『ビュビュ・ド・モンパルナス』。そこには、繁栄に向かってひた走る近代において、善を抱いて立ち止まることの難しさが描き出されていると言えるだろう。そして、その問題はまた、今なお色褪せてはいないのである。

注

1) Gustave Le Bon, *Psychologie des foules*, The Echo Library, 2008, p.3.
2) Charles-Louis Philippe, *Bubu de Montparnasse, Œuvres complètes tome III*, édition présentée et établie par David Roe, Ipomée, 1986, p.13.　以下本書からの引用は本文中のカッコ内に直接ページ数を示す。また下線は引用者による。
3) セルジュ・モスコヴィッシ『群衆の時代』, 古田幸男訳, 法政大学出版局, 1984, pp.25-26.
4) ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論 III』, 今村仁司ほか訳, 岩波書店, 1994, p.202.
5) Leo SPITZER, « Pseudo-objective Motivation in Charles-Louis Philippe » dans *Representative Essays*, Stanford University Press, 1988. 参照。
なお、拙稿「『ビュビュ・ド・モンパルナス』試論—« savoir » による人物描写とその効果—」,『広島大学フランス文学研究』26 号, 2007, pp.1-12. または、Essai sur *Bubu de Montparnasse*, Les Amis de Charles-Louis Philippe, n°65, 2009,

pp.44-51. では、とりわけ « savoir » による「偽客観的」用法に着目し、論じている。

6) Philippe Van Tieghem, *Dictionnaire des Littératures*, Presses Universitaires de France, 1968, p.3048.
7) クロード・ケテル『梅毒の歴史』, 寺田光徳訳, 藤原書店, 1996, p.320.
8) アラン・コルバン『娼婦』, 杉村和子監訳, 藤原書店, 1991, p.131, pp.151-152. 参照。
9) 今村仁司『群衆—モンスターの誕生』, ちくま新書, 1996, p.114.